

市立

1992年（平成4年）12月1日発行

# 市川自然博物館

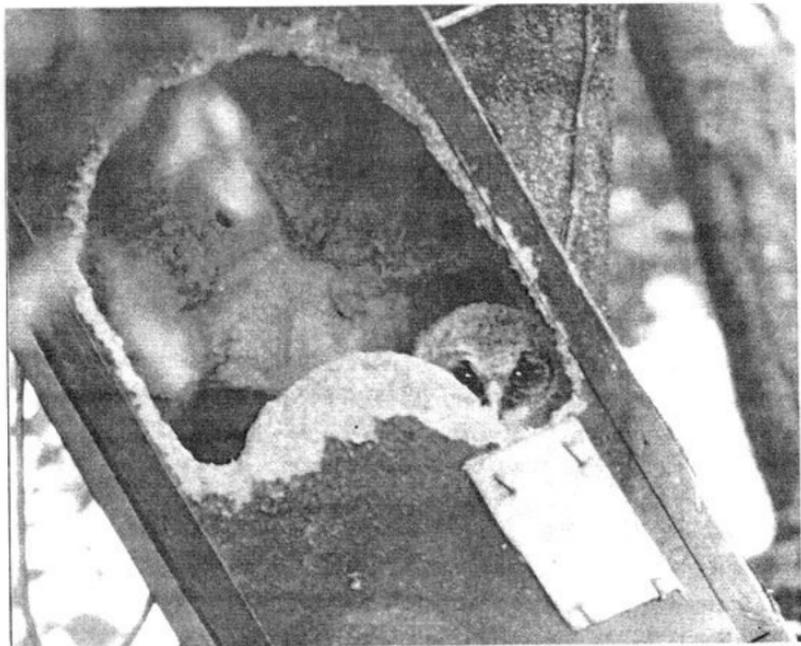
## 12・1月号

（通巻第23号）

たより

今月号の特集

### 報告 フクロウの 巣箱



▲ 巣箱から顔をみせるフクロウのひな

# 報告 フクロウ



## 巣箱をかける

自然博物館に隣接する観察園では、フクロウの鳴き声やペリット等の生活の痕跡が頻りに観察され、何度か姿も目撃されていました。餌となるアカネズミも観察園や周辺の林には、数多く生息しています。しかし、観察園でも、以前営巣していた農家の大樹でも近年営巣や繁殖が確認されていません。

こうした状況をふまえて、条件さえ整えば、観察園にフクロウが定着するのではないかと考え、巣に適した樹洞がない観察園に巣箱の設置を計画しました。

フクロウの巣箱は、直径60cm程の空洞丸太を利用したものや、一辺30cmほどのベニヤ板製の箱などで、成功の報告がされています。自然博物館では、清掃工場集めてもらった大型のスピーカーボックスを改造して、巣箱を作りました。

巣箱は、1990年12月と91年2月に観察園の東側と西側の斜面林にそれぞれ1か所づつ、樹高15m、直径40~50cmのシラカシとイヌシデに地上から5m程の高さに取り付けました。

## 1991年-フクロウの来訪

91年4月6日、西斜面の巣箱にフクロウが入っているのを初めて観察しました。5月17日までに、巣箱内とは別にもう1羽が観察園にいることも確認しました。

しかし、繁殖しませんでした。巣箱の設置が、3月頃から始まるフクロウの繁殖期には遅かったようです。巣箱を降ろしてみたとこ、卵やひな、糞などの痕跡はありませんでした。

## 1992年-ひなが巣立った

91年にはフクロウが来訪せず、そのまま放置してあった東斜面の巣箱で、今年にはフクロウが繁殖に成功し、2羽のひなが巣立ちしました。



巣立ちした幼鳥（5月9日）

## 餌のなど

巣箱でのフクロウの繁殖が成功したのは、営巣する樹洞のかわりが見つかっただけでなく、大切な条件である餌の確保が、この地域でどうにかできたからだと考えられます。しかし、餌の条件に恵まれた地域では、フクロウは4~5羽のひなを育て上げる例があり、それに比べると



# の 巣 箱



と観察園は、かなり厳しい条件といえるでしょう。

今回はベリット等の回収をしなかったので、観察園で育った2羽に、何がどれくらい与えられていたのか、わかっていません。一般には、アカネズミ等の野ネズミが餌の中心とされていますが、餌が不足するとキジバトなどの鳥類やカエル、トカゲなども餌にすると報告されています。もしそうであるとすると、餌の狩場は意外に広範囲にわたっているかもしれません。

今後、観察園と周辺の地域で、フクロウがどんな餌を探っているのかを知ることが大きな課題です。それによってフクロウと観察園のかかわり、観察園とその周辺の都市化との関係もより分かるようになるでしょう。

#### 参 考 文 献

- 浅見ペートベン；古木の洞に育つ、  
 アニマ№215(1990), pp. 19-23  
 アニマ編集部；鳥の巣づくりを手伝う、  
 アニマ№175(1987), pp. 46-48  
 阿部孝；食料をめぐるフクロウの生態、  
 野鳥№498(1988), pp. 14-17  
 大塚利昭；ペニヤ板で巣箱をつくってみた、  
 野鳥№498(1988), pp. 20-21  
 宮崎学；フクロウ、平凡社(1988)

#### 〔1992年の主な観察記録〕

月日	時間	観 察 内 容
2/28		東斜面の巣箱付近のスギ林でフクロウの声と姿を確認。
3/11	8:50	巣箱の入口の穴は大きく削り取られていて、フクロウが中でじっとしているのを初確認。もしかしたら抱卵中？
4/24	7:00	巣にひな2、親鳥1を確認！ ひなは、まだ全身灰色で1羽は風切羽の一部が茶色になっているようだ。
5/04	7:30	巣から顔をみせるひな1。写真撮影（表紙写真）。
5/08	7:30	巣にひなの姿を確認できなかった。巣立ちしてるのか？
	9:00	巣のある林内で、警戒の音を出す成鳥1を目撃。
5/09	7:30	林内で、巣立った幼鳥1を発見。全身灰白色で風切羽と尾羽は、大人の羽が見られる。じっとサワラの枝にとまっている姿は、体長30cm位に見えた。ハエが幼鳥の顔にたかってうさそうであった。
5/16	7:00	シラカシの枝によりそってとまっている幼鳥2目撃。
5/20	7:30	雄の「ホーホー、ホロツク、ホー」という一声と、雌の頻繁な警戒声が離れた場所から聞こえた。
5/21	7:00	成鳥1、幼鳥1。幼鳥（たぶん弟？）の風切羽は、ほぼ完全だが、尾羽はまだ短く、顔は綿毛で覆われている。
	7:30	幼鳥が、枝から枝へ数メートル飛ぶ。
5/25	7:00	成鳥、幼鳥とも確認できない。
5/29	18:15	霊園わきのせせらぎゾーンの道で、成鳥1目撃。



# 街かど自然探訪

おじやます!

## 上妙典・海岸植物オカヒジキ

江戸川放水路の左右両岸に、上妙典という地名があります。このうち集落は右岸（行徳側）にあり、左岸（田尻側）は飛び地の耕地だったと思われます。この2つの上妙典のうち、左岸の江戸川放水路内に、海岸植物オカヒジキの生育地があります。

オカヒジキは、海岸の砂浜に普通にはえる高さ30センチほどのアカザ科の草です。干潟とヨシ原が多い放水路ですが、湾岸道路下などに小さな砂浜があり、そこに生育しています。若葉をゆでると、おいしくて、色も美しいとされています。興味のある方は、放水路で探るのではなく、どうかスーパーでお買い求め下さい。



オカヒジキ  
(アカザ科)



# 市川のこん虫スズメバチ

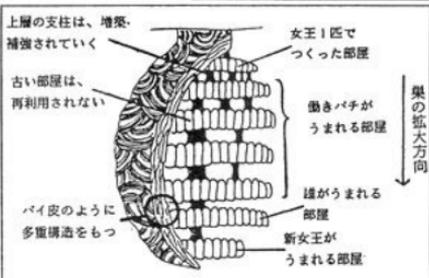


恐ろしさばかりが強調されるスズメバチですが、その生活は大胆かつ繊細で、魅力にあふれています。

無事に冬を越した雌（女王）1匹から始まるその年の新生活は、女王が次々に産む雌（働きバチ）の精力的な活動で拡大し、やがて数千匹の大家族が形成されます。そして夏の終わりに雄、続いて女王になる未来

をもつ数十匹の雌が誕生し、秋、若き女王たちが巣を離れると、数千匹の大家族の役割は、突然、終わってしまいます。1匹の女王は、数十匹の若い女王を残すために数千匹の働きバチを産み、働きバチは夏の風雨に耐える巣を、最高の技術で建築したのです。その巣の強度と快適さは、空き家になった巣をちゃっかり利用したスズメが証明していて、その巣は、博物館の軒下に現在もぶら下がっています。

（参考文献：『日本蜂類生態図鑑』 岩田久二雄 著 講談社）

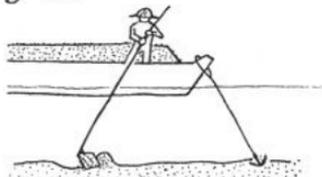


むかしの市川 ～ その19 ～

## 砂とり船

私が子どもの頃は、江戸川の水はともきれいで、川底にもゴミやヘドロは見えませんでした。利根川の上流から運ばれてきた小石は、しだいに粒が小さくなり、市川あたりでは、細かい砂となって川底につもります。この川砂を採取することを職業としている人達がありました。

江戸川にかかる京成電車の鉄橋のあたりから市川橋あたりにかけて、いつも砂とり船が川砂をとっていました。川の中ほどに伝馬船（てんまふね）という和船を止め、舟ばたに立って長い竹竿の先に鋤簾（じゆん）という道具をつけて川砂をかきとるのです。引き上げた川砂は、船の中に台形

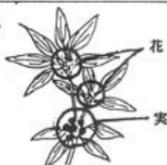


につみ上げられます。砂からしぼれる水が船底にたまるので、手こぎのポンプで排水していました。砂がいっぱいになると船を川岸に止め、こんどは「ばい助」という竹で編んだ薄いザルのようなものに砂を盛り、天びん棒の両端になわでさげ、船からかつぎ上げるのです。アリが物を運んでいるような、気の遠くなるような重労働です。このようにして集められた川砂は、天日乾燥されて、荷馬車やトラックで出荷されていました。

（博物館指導員 大野景徳記）

シロダモの花と実

花期は11~12月で、去年咲いた花が熟した赤い実と、今年の黄色い花が同時に見られます。



アオジ

湿地の茂みや林の藪のなかに隠れていたり、園路で餌を捜していたりします。「チッチッ」と鳴いている声をよく聴けます。スズメより少し大きくて、のどから腹にかけての緑があった黄色がよく目立ちます。背は灰緑色で腹には縦紋があり、迷彩色になっています。



紅葉と落ち葉

紅葉の遅いものは、12月上旬頃まで葉を残しています。林の中や園路では赤や黄色の落ち葉を拾うことができます

冬のシダ

まわりの草が枯れてくると、ベニシダやイタチシダなどの常緑性のシダが、斜面などで葉を広げているのを観察しやすくなります。

コサギ

池で魚などを捕らえています。人が近づくと驚いて飛び立ってしまいます。白鷺の中では一番小さく、足指が黄色いのがポイントです。

# 行徳野鳥観察舎

ウグイスがいっぱい

チャッ、チャッチャッ、と舌打ちのような声をする。竹やぶの中で1羽、もっと奥でもう1羽、アシのしげみからも1羽。ウグイスだ。このあたりでは冬鳥で、ここ数日来急に数がふえ、外に出ると必ず声が聞かれる。

ウグイスはちょっとしたやぶさえあれば市街地にもいるが、姿を見る機会はありません。いわゆるウグイス色とはほど遠い灰褐色の地味な小鳥で、せわしく枝移りしたり、体ごと尾をぱっぱと横にふる動作は特徴的だ。しげみの中で舌打ちしたような声が出たら、立ち止まって



文と絵・蓮尾純子

じっとしていると、ウグイスの方から人間をのぞきに出てくることがある。

晩秋。渡来したてであたりにあふれかえっているウグイスも、冬の到来とともに餌をもとめて分散してゆくことだろう。

(行徳野鳥観察舎 0473-97-9046)

わたしの  
観察 ノート No. 5

— 今年の珍しい話題 —

1. サンゴタツ

江戸川放水路沖で6月7日に投網に掛かったタツノオトシゴの一種を、妙典在住の田島光雄さんが博物館に届けてくださいました。今夏の企画展で飼育展示中、同じ水槽の何者かに食べられてしまったため標本は残っていませんが、生時に撮影した写真から判断すると、サンゴタツという種類ようです。サンゴタツは、函館以南、本州西部まで分布し、内湾のアマモ帯に多く生息します。

2. クマゼミ

西南日本に多い日本最大のせみ・クマゼミは、近年、都内で頻繁に観察されるようになったみたいですが、博物館にも、市内での観察報告が昨年から届けられています。

1992年の観察報告

- ・ 8月14日 行徳駅前の東根公園 (89年以降、毎年確認)  
行徳駅前在住 八角美智枝さん
- ・ 8月24日 北国分町の竹やぶで  
北国分町在住 松江佳子さん
- ・ 8月30日、9月2日 大町自然観察園  
船橋市在住 阿部則雄さん

3. オオアオイトトンボ

国府台在住の秋元久枝さんから、「いままで見たことのないトンボか、カゲロウを見ました」というお便りをいただきました。そこに書かれていた特徴や外観から、それはオオアオイトトンボであることがわかりました。

オオアオイトトンボは、緑色の金属光沢が美しいトンボで、湿地や池と雑木林が組み合わさった環境に生息します。船橋市には、斜面林の小道を上がっていくと、足元から沸き立つようにオオアオイトトンボが飛び上がる場所が残っていますが、市川市内では、大町自然観察園でも、それほど多くは見られません。

4. キイトンボとアカタテハ

菅野在住の山崎剛介さんから、7月下旬キイトンボ、10月25日アカタテハを、いずれも菅野で観察したという報告をいただきました。キイトンボは、名前のお通り全身が黄色の鮮やかなイトトンボで、水田や湿地で普通に見られますが、市内ではそういう環境の減少とともに、目にすることが少なくなりました。アカタテハも、最近はずいぶん見る機会が減ったような気がします。

☆☆☆☆ 自然博物館の行事案内 ☆☆☆☆

\*自然観察会

「1月の自然観察会」

1. 日時 1月17日(日)  
午前9時30分～11時30分
2. 場所 香野周辺
3. 内容 クロマツの観察
4. 申込期間 1/4～1/9
5. 定員 20名

「2月の自然観察会」

1. 日時 2月14日(日)  
午前9時30分～11時30分
2. 場所 自然観察園
3. 内容 冬鳥の観察
4. 申込期間 2/1～2/6
5. 定員 20名

申込み方法

各行事とも、往復はがきに参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、申込期間内に、自然博物館までお送り下さい。

\* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

スライドによる 自然講座

市川市内の自然の様子を、写真スライドを見ながら解説します。

1. 日程 第1回 1月23日(土) 「市川の山野草#2-キク科とその分類-」  
第2回 1月30日(土) 「市川の野生動物#1-フクロウとその仲間たち」  
第3回 2月6日(土) 「市川の川を下る#2-国分川-」
2. 時間 午後6時～8時
3. 会場 市民談話室
4. 定員 50名

申込みは必要ありません。直接会場におこしください。

\* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

年末年始 休館のおしらせ

自然博物館は、年末は12月27日(日)まで閉館し、年始は1月5日(火)より開館いたします。

開館時間は、通常どおり午前9時30分より午後4時30分です。お間違えのないようお願いいたします。

市立市川自然博物館だより  
第4巻 7号 (通巻第23号)  
発行日/ 平成4年12月1日  
編集・発行/ 市立市川自然博物館  
〒272 千葉県市川市大町 284番地  
☎ 0473(39)0477

次号は2月1日発行